

IV ドライクリーニング

目次（ドライクリーニング）

VOC発生要因のチェック	86
VOC排出抑制策一覧	87
個別の抑制策の説明	
1 抑制策の選択	89
1-1 排出実態の把握 新	89
2 工程・設備の改善	90
2-1 前処理および染み抜き作業の必要性の見直し	90
2-2 クリーニング液の交換・充填における漏出防止	91
2-3 クリーニング液の冷却	92
2-4 被洗物へのクリーニング液の残留防止	93
2-5 クリーニング液の保管・貯蔵における揮発防止	94
2-6 撥水加工作業における揮発防止	95
3 原材料の転換	96
3-1 水洗いへの転換	96
4 処理装置の導入	97
4-1 ホット機への転換	97
4-2 回収機能付き乾燥機への転換	98
4-3 回収機能付きハンガー乾燥機の導入	99
索引	100

IV

ドライクリーニング

VOC発生要因のチェック

工程フローとチェックポイント

石油系溶剤

工程フロー	チェックポイント	VOCの排出要因	VOC発生割合の目安	「抑制策の選択」で対応するNo.
準備	<input type="checkbox"/> 前処理（ささら掛け、ブラッシング、プリスポッティング等）や染み抜きは、本当に必要か。溶剤を使いすぎしていないか。 <input type="checkbox"/> クリーニング液の交換・充填の際に液が漏れていないか。	注入時のクリーニング液の揮発	5%程度以下	2-1~2-2
洗濯 脱液 乾燥	<input type="checkbox"/> 生地の厚さによって洗い分けしているか。 <input type="checkbox"/> 水洗いに変更することはできないか。 <input type="checkbox"/> ワッシャーは冷却されているか。 <input type="checkbox"/> 洗濯後、直ぐに乾燥機に入れているか（乾燥機に回収機能が付いている場合）。 <input type="checkbox"/> ホット機に転換できないか。 <input type="checkbox"/> 回収機能付きの乾燥機を導入できないか。 <input type="checkbox"/> ハンガー乾燥機を導入できないか。	クリーニング液の揮発	90%程度	2-4 3-1 2-3、2-4 4-1~4-3
保管	<input type="checkbox"/> 保管庫の温度管理を行っているか。缶に直射日光は当たっていないか。 <input type="checkbox"/> クリーニング液の缶の蓋は、使わないときには必ず密閉しているか。	保管時のクリーニング液の揮発	5%程度以下	2-5
撥水加工	<input type="checkbox"/> 撥水加工をワッシャー内で行えないか。 <input type="checkbox"/> 水系の撥水剤を使えないか。 <input type="checkbox"/> 撥水加工作業は、局所排気のある場所で行っているか（VOC処理装置がある場合）。	撥水加工溶剤の揮発	5%程度以下	2-6

《 ドライクリーニングで使用されているVOCの例 》

用途：クリーニング液、撥水加工剤溶剤

VOC：石油系溶剤、テトラクロロエチレン（パーク）、1,1,1-トリクロロエタン など

IV

VOC排出抑制策一覧

ドライクリーニング

IV

ドライクリーニング

抑制策の選択

No.	対策	対象		対策実施の効果やコスト等				改善効果 作業環境
		石油系	パーク	削減効果 VOC	コスト			
					イニシャル	ランニング (運転費)	ランニング (資材購入費 削減効果)	
1-1	排出実態の把握 新	○	○	-	1~3	1	-	-

工程・設備の改善

工程 フロー	No.	対策	対象		対策実施の効果やコスト等				改善効果 作業環境
			石油系	パーク	削減効果 VOC	コスト			
						イニシャル	ランニング (運転費)	ランニング (資材購入費 削減効果)	
準備	2-1	前処理および染み抜き作業の必要性の見直し	○	○	1	1	1	-	1
	2-2	クリーニング液の交換・充填における漏出防止	○	○	1	1	1	-	1
洗濯 脱液 乾燥	2-3	クリーニング液の冷却	○		2	3	2	-	1
	2-4	被洗物へのクリーニング液の残留防止	○	○	2	1	2	-	1
保管	2-5	クリーニング液の保管・貯蔵における揮発防止	○	○	1	1	1	-	1
撥水 加工	2-6	撥水加工作業における揮発防止	○	○	1	1~3	1	-	1

原材料の転換

No.	対策	対象		対策実施の効果やコスト等				改善効果 作業環境
		石油系	パーク	削減効果 VOC	コスト			
					イニシャル	ランニング (運転費)	ランニング (資材購入費 削減効果)	
3-1	水洗いへの転換	○	○	5	4	3	-	3

処理装置の導入

No.	対策	対象		対策実施の効果やコスト等				
		石油系	パーク	削減効果 VOC	コスト			作業環境 改善効果
					イニシャル	ランニング (運転費)	ランニング (資材購入費 削減効果)	
4-1	ホット機への転換	○		5	4	1	3	1
4-2	回収機能付き乾燥機への転換	○		5	4	1	3	1
4-3	回収装置付きハンガー乾燥機の導入	○		5	4	2	3	3

※ VOC削減効果：1（低い）～ 5（高い）

※ イニシャルコスト：1（低い）～ 5（高い）

※ ランニングコスト：1（低い）～ 3（高い）
（運転費）

※ ランニングコスト：1（削減率低い）～ 3（削減率高い）
（資材購入費削減効果）

※ 作業環境改善効果：1（低い）～ 3（高い）

具体的には、ivページの「凡例」を参照してください。

IV

ドライクリーニング

排出実態の把握 **新**

IV

ドライクリーニング

◆ VOC削減効果

低←1 2 3 4 5→高

◆ イニシャルコスト

~20万円

③① ②

低←1 2 3 4 5→高

番号は対策番号に対応

◆ ランニングコスト

(運転費)

~10万円/月



低←1 2 3→高

◆ 作業環境改善効果

低←1 2 3→高

ポイント！

VOCの排出実態を調査することで、より効果的にVOC排出抑制策を実施することができます。

解説

VOCの使用状況は工場や事業所ごとに異なります。工場内のどの場所から、どの作業を行っている時にVOCが排出されているのか把握することで、より最適なVOC排出抑制策を講じることができます。また、VOC排出抑制策の効果を検証することもできます。

[対策①:簡易測定法によるVOC濃度の測定]

自主的取組や自主管理に関連してVOC濃度を測定する場合は、簡易型VOC測定機を使用することができます。購入費用は、測定原理や性能面(測定可能な成分など)の違いにより幅がありますが、10万円程度から購入することができます。

また、さらにコストを抑えたい場合は検知管を使用してVOC濃度を測定することもできます。検知管はガス採取器とガス検知管で構成されますが、ガス採取器は2万円程度、ガス検知管は安いものだと10本入り1箱2,000円程度で販売されています。

[対策②:VOC警報器の活用]

工場内のVOC濃度が一定値を超えると、ランプと音で警報を発するガス警報器が商品化されています。価格の目安としては1台で10万~20万円程度です。

[対策③:「東京都VOC対策アドバイザー派遣制度」の活用]

専門家によるVOC濃度の測定を依頼したい場合には「東京都VOC対策アドバイザー派遣制度(無料)」が活用できます。この制度ではアドバイザーが事業所を訪問し、ハンディーVOC計による簡易測定を行った後、それぞれの事業所に合った効果的なVOC対策について助言を行います。

この制度の申し込み等の詳細は「東京都環境局 環境改善部 化学物質対策課 企画係」(付録の相談先一覧を参照)にお問い合わせください。

IV

ドライクリーニング

前処理および染み抜き作業の 必要性の見直し

◆ VOC削減効果

～5%



◆ イニシャルコスト

～1万円



◆ ランニングコスト

(運転費)

変わらない



◆ 作業環境改善効果

効果低い



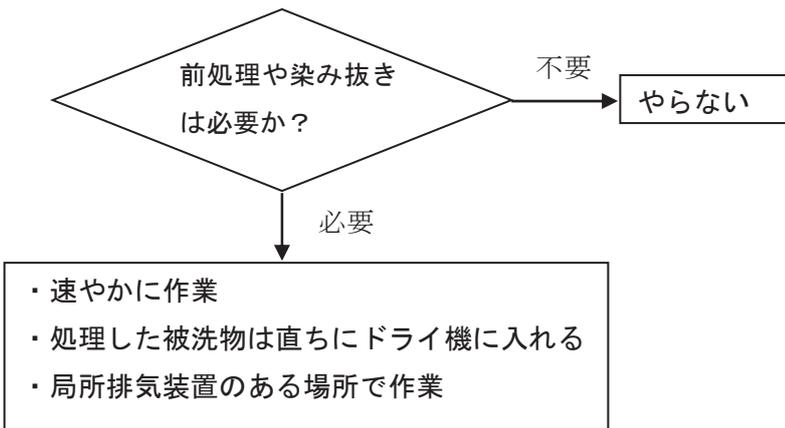
ポイント！

前処理や染み抜き作業の適正化で、溶剤使用量を削減できます。

解説

溶剤を含む処理液による前処理(ささら掛け、ブラッシング、プリスポットティング等)や染み抜き作業の必要性を見直し、作業は極力行わないようにしましょう。

やむを得ずこれら作業を行う場合は、できるだけ速やかに行い、また可能であれば、局所排気装置(排ガス処理装置付き)のある場所で行い、処理した被洗物は直ちにドライ機に入れるなど、適切な対処をしましょう。



<前処理剤の主な成分例 ※太字:VOCに該当する可能>

用途	成分
汗除去剤	ノニオン界面活性剤、 アルコール 、有機酸、水
黄変除去剤	酸素系漂白剤、 アルコール類 、シリコーン、安定化剤、水
前処理剤	ノニオン界面活性剤、 アルコール 、水、シリコーン
染み抜き・前処理剤	アニオン界面活性剤、 特殊アルコール類 、 グリコールエーテル類
油性の染み抜き剤	有機溶剤 、アニオン・ノニオン系界面活性剤
タンパク質系の染み抜き剤	アニオン界面活性剤、pH調整剤、イオン水
タンニン系の染み抜き剤	アニオン・ノニオン界面活性剤、pH調整剤、イオン水
インク専用染み抜き剤(油性インク)	アルコール類 、他
インク専用染み抜き剤(水性インク)	アニオン・ノニオン界面活性剤、水

(出典:メーカー資料より作成)

IV

ドライクリーニング

クリーニング液の交換・充填 における漏出防止

IV

ドライクリーニング

● VOC削減効果

～5%



低←1 2 3 4 5→高

● インシャルコスト

～1万円



低←1 2 3 4 5→高

● ランニングコスト

(運転費)

変わらない



低←1 2 3→高

● 作業環境改善効果

効果低い



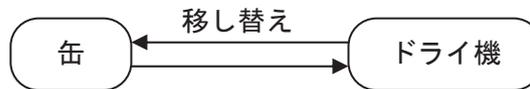
低←1 2 3→高

ポイント！

クリーニング液の交換・充填時における、クリーニング液の漏出を防ぎます。

解説

VOCの排出抑制のためには、クリーニング工程の改善だけでなく、クリーニング液の交換・充填時の管理も重要です。



[対策:クリーニング液の移し替えにはポンプを用いる]

クリーニング液を缶からドライ機、あるいはドライ機から缶等に移し替える際には、手作業での移し替えは避け、手動ポンプや自動ポンプを使用しましょう。また、クリーニング液の充填用ポンプが付いているドライ機も製品化されています。

留意事項

- ・テトラクロロエチレン(パーク系クリーニング液)を使用している場合は、塩素系溶剤専用のポンプを使いましょう。
- ・必要に応じて、保護眼鏡、保護手袋、マスク等の保護具を着用しましょう。
- ・ドライ機が作動中は、クリーニング液の充填を決して行わないようにしましょう。
- ・テトラクロロエチレン1,1,1-トリクロロエタンなどを漏出させると、土壌・地下水汚染の原因となります。

IV

ドライクリーニング

クリーニング液の冷却

● VOC削減効果

5～10%



低←1 2 3 4 5→高

● イニシャルコスト

10～100万円



低←1 2 3 4 5→高

● ランニングコスト

(運転費)

1～2倍



低←1 2 3→高

● 作業環境改善効果

効果低い



低←1 2 3→高

ポイント！

クリーニング液を冷却することによって、VOCの排出量を抑制できます。(コールドタイプのオープンワッシャーの場合)

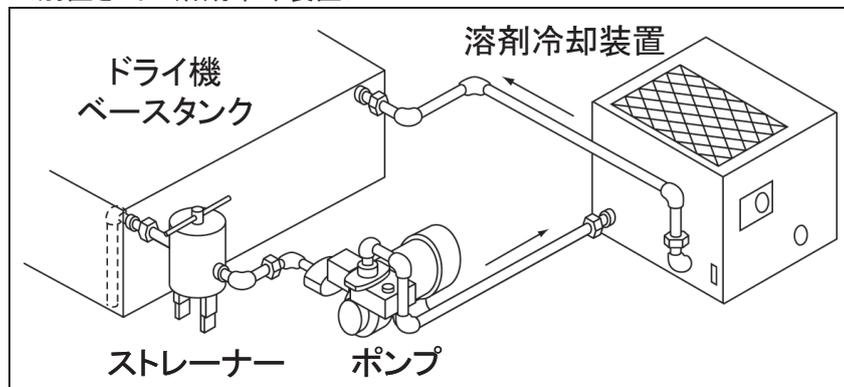
解説

コールドタイプのオープンワッシャーの場合、特に夏場は気温が高いため、ワッシャーから揮発する溶剂量が多くなります。

1日1～2ワッシャー程度の生産量の少ないユーザーは溶剤の温度が上昇しにくいため、冷却装置が付いていない場合がありますが、新たに溶剤冷却装置を導入し、ワッシャーを冷却するようにしましょう。溶剤冷却装置には、組込み式と別置き式の2タイプが市販されています。

溶剤の温度が上昇すると警報が出るタイプのワッシャーも市販されています。

<別置き式の溶剤冷却装置>



(出典:メーカー提供資料より)

メリット

大気中に放出していたクリーニング液の無駄な揮発を防ぐことになるので、クリーニング液の使用量削減になり、その分、コスト削減になります。

関連事項

- ・この対策は、安全性の確保という意味でも重要です。石油系溶剤は36℃以上の温度になると引火しやすくなり、火災や爆発の危険性が高くなります。
- ・冷却能力を高めるためには設備や維持費がかかります。

IV

ドライクリーニング

被洗物へのクリーニング液の 残留防止

IV

ドライクリーニング

◆ VOC削減効果

5～10%

低←1 2 3 4 5→高

◆ イニシャルコスト

～1万円

低←1 2 3 4 5→高

◆ ランニングコスト

(運転費)

1～2倍

低←1 2 3→高

◆ 作業環境改善効果

効果低い

低←1 2 3→高

ポイント！

被洗物に残留したクリーニング液はVOCの発生源となります。被洗物の分類等の工夫と、回収機能付き乾燥機の併用により、残留クリーニング液を削減できます。

解説

被洗物に残留したクリーニング液は、VOCの発生源となり作業環境を悪化させるだけでなく、衣類着用時に化学やけどを引き起こす原因となるので、乾燥は十分に行いましょう。また、溶剤の残留を避けるためには、各作業工程において、被洗物を分類するなどの工夫を行うことが大切です。

ただしこの対策は、回収機能付き乾燥機を導入していることが前提です。

[対策①: 被洗物の分類]

被洗物は、生地の厚さによって乾燥時間が違うので、乾燥が速いもの(薄手のもの等)と乾燥が遅いもの(厚手のもの等)に分けて乾燥を行いましょう。これらを混ぜて行くと、厚手のものの乾燥が不十分になり、クリーニング液が残留する場合があります。

[対策②: 被洗物の投入量の適正化]

ドライ機には、それぞれ標準負荷量が決まっているので、1回の投入量はこれを上回らないようにしましょう。特に繁忙期には、標準負荷量よりも多めに投入しがちですが、投入量が多いと乾燥が不十分になります。

[対策③: 洗濯後、すぐに乾燥機に入れる]

乾燥前の被洗物にはクリーニング液が残っており、徐々に揮発しています。そのため、コールド機の場合は、洗濯後に取り出した被洗物を放置したままにせず、乾燥機に入れるまでの時間をできるだけ短くしましょう。

[対策④: 乾燥の時間・温度設定の適正化]

被洗物にクリーニング液が残留しないように、被洗物の投入量、生地の種類・厚さに見合った乾燥温度・時間を設定しましょう。溶剤臭がしなくなるまで十分に乾燥させることが重要です。

メリット

仕上げ品質の向上につながり、化学やけどの事故を未然に防ぎます。

留意事項

- ・クリーニング液の残留判定については、ドライチェッカーで行うことができます。
- ・この対策は、回収機能付き乾燥機を導入していることが前提です。

関連事項

- ・「4-1 ホット機への転換」も参照してください。
- ・「4-2 回収機能付き乾燥機への転換」も参照してください。
- ・「4-3 回収機能付きハンガー乾燥機の導入」も参照してください。

IV

ドライクリーニング

クリーニング液の保管・貯蔵 における揮発防止

● VOC削減効果

～5%



低←1 2 3 4 5→高

● インシャルコスト

～1万円



低←1 2 3 4 5→高

● ランニングコスト

(運転費)

変わらない



低←1 2 3→高

● 作業環境改善効果

効果低い



低←1 2 3→高

ポイント！

クリーニング液の適正な保管・管理を徹底し、揮発ロスを失くします。

解説

VOCの排出抑制のためには、クリーニング液の保管・貯蔵時の管理も重要です。

[対策①: クリーニング液の入った缶・容器の蓋閉め励行]

クリーニング液の入った缶・容器は、必要なとき以外は、蓋をしっかりと閉めて、溶剤が揮発しないようにしましょう。

[対策②: 容器の栓・蓋のチェック]

クリーニング液を保管・貯蔵する容器は丈夫な材質のものを使い、容器の破損や栓・蓋の外れによって、クリーニング液が漏洩しないようにしましょう。プラスチック容器は溶剤の種類によっては膨潤し、壊れることがあるので注意しましょう。

[対策③: 容器の置き場所のチェック]

クリーニング液を屋外に貯蔵する場合は、屋根を設置しましょう。屋根を設置するのが困難な場合は、容器にカバーをかけるなどの対策を行い、直射日光や雨水が当たらないようにしましょう。

また、屋内に貯蔵する場合は、換気できる冷暗所に保管しましょう。

IV

ドライクリーニング

撥水加工作業における揮発防止

IV

ドライクリーニング

● VOC削減効果

～5%



低←1 2 3 4 5→高

● イニシャルコスト

1～100万円

②③ ①



低←1 2 3 4 5→高

番号は対策番号に対応

● ランニングコスト

(運転費)

変わらない



低←1 2 3→高

● 作業環境改善効果

効果低い



低←1 2 3→高

ポイント！

撥水加工剤にはVOCを含むものがあります。水系の撥水加工剤への代替及び作業を工夫することで、VOCの排出を抑制します。

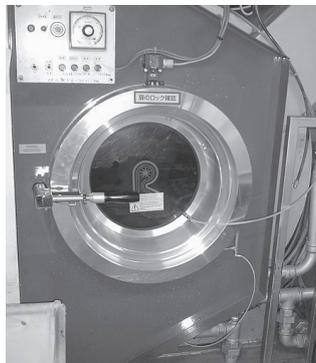
解説

撥水加工をハンドスプレーガンで行う場合、撥水加工剤に含まれるVOCが作業場内に気散します。VOCが拡散しないように対策を取りましょう。

[対策①: ワッシャー内で加工する]

撥水加工はできるだけワッシャー内で加工するようにしましょう。ワッシャー内で加工するためには、以下のような装置の改造・導入が必要となります。

<ワッシャー内加工に必要な改造>



ドラムを改造してノズルを付け、そこに撥水加工剤のスプレー装置を取り付ける。



撥水加工剤をドラムに送り込むためのコンプレッサーとポンプを設置する。

[対策②: 水系の撥水加工剤に代替する]

撥水加工剤の中には、水系のものが市販されています。水系の加工剤に変更できないか検討してみましょう。加工方法としては、つけ込み加工、ワッシャー加工、スプレー加工が可能です。

[対策③: 加工作業場所を変更する]

排ガス処理装置付きの局所排気がある場合は、局所排気に近い場所で撥水加工作業を行いましょう。

IV

ドライクリーニング

水洗いへの転換

◆ VOC削減効果

90%~

低←1 2 3 4 5→高

◆ イニシャルコスト

200万~300万円

低←1 2 3 4 5→高

◆ ランニングコスト

(運転費)

2倍~

低←1 2 3→高

◆ 作業環境改善効果

効果高い

低←1 2 3→高

ポイント！

ドライクリーニングから水洗いに転換することで、VOCを含むクリーニング液を使用しないで済みます。

解説

表示マークがドライ指定の商品でも水洗いで汚れが落ちる場合があります。これまで、ドライクリーニングを行っていた被洗物について、水洗いできないか検討しましょう。特に夏物の汗による汚れを洗い落とすには、水洗いの方が適しています。また化学繊維物は、水洗いに変更しやすい場合があります。

＜水洗いの実施方法＞

装置面	<p>機械力の弱いクリーニングを行う。</p> <p>例えば、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手洗いする ・家庭用洗濯機を使う ・ランドリーの回転数を減らす <p>など</p>
洗剤面	<p>水洗い専用の洗剤を使う。</p> <p>＜特徴＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色出しにくい ・収縮しにくい ・皺になりにくい <p>など</p>

留意事項

- ・ドライクリーニングとは異なる、水洗い及び仕上げの技術が必要になります。
- ・ハンドアイロンによる仕上げの手間がかかるため、生産性が落ちます。

IV

ドライクリーニング

ホット機への転換

IV

ドライクリーニング

◆ VOC削減効果

80%程度

低←1 2 3 4 5→高

◆ イニシャルコスト

600万～800万円

低←1 2 3 4 5→高

◆ ランニングコスト
(運転費)

変わらない

低←1 2 3→高

◆ ランニングコスト
(資材購入費削減効果)

クリーニング液購入費
90%程度削減

低←1 2 3→高

◆ 作業環境改善効果

効果低い

低←1 2 3→高

◆ 新たに必要スペース

1～10m²

小←1 2 3→大

ポイント！

被洗物の移し換え及び乾燥の際に揮発するクリーニング液を回収し、VOCの排出を抑制します。

解説

ホット機とは、1台で洗濯、脱液、乾燥まで行うタイプのクリーニング機のことです。装置は密閉式で、洗濯・脱液後、被洗物を移し換えずに乾燥まで行い、乾燥工程で揮発するクリーニング液は回収されます。

通常、石油系のコールド機では、引火点が 42℃前後のクリーニング液が使われるのに対して、ホット機では引火点が高いクリーニング液が使われるので、爆発の危険性は低くなります。さらに、乾燥工程での安全対策として、(1)減圧方式、(2)窒素置換方式、(3)濃度管理方式のいずれかが採用され、爆発限界以下に制御されています。

<ホット機の説明>



- ①洗濯、すすぎ、脱液を行う。
- ②熱風によって、被乾燥物から溶剤(クリーニング液)を揮発させる。
- ③溶剤ガスをクーラーで冷却・液化させる。
- ④液化物を、水分離機で溶剤と水に分離する(溶剤は回収される)。
- ④回収した溶剤はクリーニング液として再利用する。

メリット

クリーニング液を回収して再利用できるので、クリーニング液の使用量削減になり、その分、コスト削減にもなります。

留意事項

・溶剤の使用量は減りますが、洗濯と乾燥を同時並行できないため、生産効率が低下します。

IV

ドライクリーニング

回収機能付き乾燥機への転換

● VOC削減効果

80%程度

低←1 2 3 4 5→高

● インシャルコスト

200~300万円

低←1 2 3 4 5→高

● ランニングコスト (運転費)

変わらない

低←1 2 3→高

● ランニングコスト (資材購入費削減効果)

クリーニング液の購入費
90%程度削減

低←1 2 3→高

● 作業環境改善効果

効果低い

低←1 2 3→高

● 新たに必要スペース

1~10m²

小←1 2 3→大

ポイント!

被洗物の乾燥の際に揮発するクリーニング液を回収し、VOCの排出を抑制します。

解説

クリーニング液の回収機能のない乾燥機の場合、被洗物から揮発したクリーニング液は屋外に排気されます。既存の乾燥機に回収装置を追加するか、回収機能付き乾燥機に転換することによって、VOCの排出量を抑制することができます。

また、大気に放出していたクリーニング液を回収・再利用するので、クリーニング液の使用量削減になり、その分、コスト削減にもなります。

<回収機能付き乾燥機の説明>



- ①熱風によって、被乾燥物から溶剤(クリーニング液)を揮発させる。
- ②溶剤ガスをクーラーで冷却・液化させる。
- ③液化物を、水分離機で溶剤と水に分離する(溶剤は回収される)。
- ④回収した溶剤は、クリーニング液として再利用する。

メリット

クリーニング液の使用量削減になり、その分、コスト削減にもなります。1日のワッシャー数にもよりますが、1年程度で回収機能付き乾燥機の購入費用を回収することができます。

クリーニング液が年間約 14,400L 回収されることで、クリーニング液の購入費用が年間約 277.4 万円削減され、リース代を含めても年間でトータルコストが約 213.6 万円削減される試算結果が報告されています。

<算出条件>

負荷量 22kg、1日 16 ワッシャー、25 日/月稼働、溶剤 180 円/L、電気代 11.8 円/kwh(使用料のみ)、蒸気代5円/kg、リース代5年(利率 0.02)

(出典:メーカー資料)

留意事項

- ・引火爆発事故の原因となる乾燥中に発生する静電気は、洗浄溶剤に洗剤を規定量投入することで防止できます。洗剤の濃度は 0.5% 以上に管理しましょう。
- ・特殊な洗剤(シンナー、アルコールなど引火点の低い溶剤の入ったもの)の使用は避けましょう。

IV

ドライクリーニング

回収機能付きハンガー乾燥機の導入

IV

ドライクリーニング

◆ VOC削減効果

80%程度

低←1 2 3 4 5→高

◆ イニシャルコスト

300~400万円

低←1 2 3 4 5→高

◆ ランニングコスト (運転費)

1~1.2倍

低←1 2 3→高

◆ ランニングコスト (資材購入費削減効果)

クリーニング液購入費
90%程度削減

低←1 2 3→高

◆ 作業環境改善効果

効果高い

低←1 2 3→高

◆ 新たに必要スペース

1~10m²

小←1 2 3→大

ポイント!

自然乾燥が求められる衣類について、乾燥の際に揮発するクリーニング液を回収し、VOCの排出を抑制します。

解説

洗浄後の衣類を室内で自然乾燥させる場合、被洗物から揮発したクリーニング液は、やがて屋外に排気されます。

ハンガー乾燥機は、タンブラーが使えず、自然乾燥が求められる衣類の乾燥に用いる装置です。その際クリーニング液を回収することができます。

また、室内環境の改善にもつながります。

<ハンガー乾燥機の説明>



- ①被乾燥物を、キャビネット内にハンガーで吊るす。
- ②熱風によって、被乾燥物から溶剤(クリーニング液)を揮発させる。
- ③溶剤ガスをクーラーで冷却・液化させる。
- ④液化物を、水分離機で溶剤と水に分離する(溶剤は回収される)。
- ⑤回収した溶剤は、クリーニング液として再利用する。

メリット

クリーニング液の使用量削減になり、その分、コスト削減にもなります。また、室内環境が改善されます。

関連事項

- ・「2-4 被洗物へのクリーニング液の残留防止」も参照してください。

索引（ドライクリーニング）

アルファベット

VOC警報器	89
VOC測定機	89

か行

回収機能付き乾燥機	98
回収機能付きハンガー乾燥機	99
乾燥温度	93
乾燥時間	93
クリーニング液の回収・再利用	97,98,99
クリーニング液の交換・充填	91
クリーニング液の残留	93
クリーニング液の冷却	92
検知管	89

さ行

染み抜き	90
充填用ポンプ	91

た行

東京都VOC対策アドバイザー派遣制度	89
--------------------	----

な行

濃度測定	89
------	----

は行

排出実態	89
撥水加工	95
被洗物の投入量	93
被洗物の分類	93
ホット機	97

ま行

前処理	90
水洗い	96

や行

容器の置き場所	94
容器の蓋閉め	94
容器や栓・蓋の材質	94